

博士学位論文審査要旨

2019年12月20日

論文題目： 制御焦点が課題への取り組みの粘り強さに与える影響と
その効果量の推定

学位申請者： 長谷 和久

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 中谷内 一也

副査： 心理学研究科 教授 神山 貴弥

副査： 滋賀県立大学人間文化学部 講師 後藤 崇志

要 旨：

制御焦点理論は人の目標志向性を、損失の存在・不在に焦点化して行動制御を行う予防焦点と、獲得の存在・不在に焦点化して行動制御を行う促進焦点とに大きく分類し、課題達成のための認知過程や達成レベルへの異なった影響を説明するモデルである。これまでの研究では、予防焦点は現状維持と損失回避傾向として示される警戒方略を、一方、促進焦点は現状回避と獲得追求傾向として示される熱望方略を導きやすく、予防焦点は促進焦点に比べて、創造性課題を始めとした多様な認知課題において成績が低いことが報告されてきた。

しかしながら、そのような結果は課題実施時の時間制限設定や特定のプライミングによる制御焦点の操作などによって生じるものであり、別の条件下では、予防焦点は粘り強い取り組みをもたらし、結果として高い課題成績を示すことになるのではないか。これが本論文の一貫した問題意識であった。本論文では、第1章において、従来しばしば用いられてきた迷路課題によるプライミングに比べ、義務・理想自己プライミングを用いた場合は、予防焦点が創造性課題の成績を低下させる影響力は限定的なものになることを示した。第2章では前章の実験結果と文献レビューに基づいて前述の問題意識を仮説へと展開し、その論拠を議論している。続く第3章、第4章では一連の実験結果から、(1)個人特性としての予防焦点傾向が創造課題への取り組みの粘り強さを高めること、(2)予防焦点をもたらす実験操作が概ね粘り強さを高めること、を明らかにした。しかし、(3)それらによって課題の成績が高められるという予測については、支持される結果と支持されない結果とに分かれていた。そこで第5章では小規模メタ分析を実施し、予防焦点は促進焦点よりも課題への取り組みが粘り強くなることを確認し、また、効果量は低いながらも、課題成績も高くなることを明らかにした。以上のように本論文は、予防焦点は促進焦点よりも課題成績を悪化させやすいという一般的な主張に再考を迫り、むしろ、予防焦点が優越しうることに關して新たな知見を提供するものであった。

よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2019年12月20日

論文題目： 制御焦点が課題への取り組みの粘り強さに与える影響と
その効果量の推定

学位申請者： 長谷 和久

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 中谷内 一也

副査： 心理学研究科 教授 神山 貴弥

副査： 滋賀県立大学 人間文化学部 講師 後藤 崇志

要 旨：

上記審査委員3名は、2019年12月19日(木)午後5時より1時間に及ぶ博士学位論文公聴会の後、午後6時10分より2時間にわたって学位申請者に対して総合試験を行った。

学位申請者は、提出した論文に関する審査委員からの専門的質疑に対して、適切な説明と応答を行い、本論文の学術的価値を証明した。また、申請者は本研究の基礎となる社会心理学領域について、広範な専門的知識を持ち合わせていることが確認された。さらに、引き続き実施された語学試験と第一著者として発表された英語論文についての質疑から、十分な語学力(英語)を有することも認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：制御焦点が課題への取り組みの粘り強さに与える影響とその効果量の推定

氏名：長谷和久

要旨：

与えられた課題に対して継続的に努力を傾ける行為、すなわち課題に対する粘り強さ (persistence) は、創造性課題 (Lucas & Nordgren, 2015)、認知課題 (Markman, McMullen, & Elizaga, 2008)、分析的課題 (Miele, Molden, & Gardner, 2009)、記憶課題 (Roediger & Thorpe, 1978) といったさまざまな種類の課題パフォーマンスを高める共通の要因であることが明らかにされている。本稿では、どういった内容の目標をもって課題や活動に従事するかという目標志向性 (goal orientation) が、課題に対する粘り強さに影響する可能性について実証的に検討を行った。とくに本稿においては、獲得 (gain) と損失 (loss) のどちらに焦点をあてるか (すなわち制御焦点の差異) によって、個人の目標志向性を2種類——予防焦点 (prevention focus) と促進焦点 (promotion focus)——に大別する制御焦点理論 (Regulatory focus theory) に立脚し、制御焦点の差異と課題に対する粘り強さの関係性について明らかにすることを目的とした。本稿では研究1から研究6までの6つの研究を行ったが、このうち、研究1は制御焦点理論に関する先行研究の概念的追試研究であり、研究2は制御焦点理論の視座に立って研究することの意義に関する研究である。つづく、研究3-6において制御焦点の差異が課題に対する粘り強さに与える影響について検討を行った。

制御焦点理論は、人を含めた生物一般が有する快に接近し、不快を避けるという快樂原則 (hedonic principle) を基礎にして Higgins (1997) によって提唱されたものである。制御焦点理論では、快樂原則を基礎にした従来までの動機づけに関する理論のように快をもたらす状態への接近に関する動機づけか、それとも不快をもたらす対象からの回避に関する動機づけか、によって人の目標志向性を区別するのではなく、接近対象と回避対象の質的な違いにもとづいて目標志向性を特徴づけている。詳細には、獲得の存在に接近し、獲得の不在から回避する促進焦点と、損失の不在に接近し、損失の存在を回避する予防焦点によって人の目標志向性を特徴づける。これまでの制御焦点理論に関する研究において、個人の制御焦点はリスク下の意思決定、道徳的行動、選好、課題パフォーマンスなどのさまざまな心理的・行動的側面に影響を及ぼすことが明らかにされている (Higgins & Cornwell, 2016)。こうした制御焦点の影響には一貫性が認められ、促進焦点はリスクを被っても獲得状況への接近を目指す熱望方略 (eager strategy) によって行動を制御しており、予防焦点は可能性のある損失を慎重に避ける警戒方略 (vigilant strategy) によって行動を制御することが指摘されている。

こうした熱望方略と警戒方略は、とくに実験室で実施される課題パフォーマンスに対して異なる影響をもたらすことが確認され、なかでもリスク希求的な促進焦点が採用する熱望方略は新奇な刺激への開放性をもたらし、創造的パフォーマンスに対して肯定的な影響をもたらす。他方で、先行する解答に引きずられる傾向が強い予防焦点は創造的パフォーマンスに対して否定的な影響をもたらすことが頑健性の高い知見として繰り返し示されていた (たとえば、Friedman & Förster, 2001)。これを受け、本論文の研究1では先行研究とは異なる方法で制御焦点を操作した後、創造性課題 (Unusual Uses Test) を実施し、先行研究の概念的追試を試みた。その結果、創造的パフォーマンスを示す指標において、制御焦点を操作したことによる影響が見られないものも

あったが、一部の指標では予防焦点が促進焦点よりも創造的パフォーマンスを低下させることが明らかになり、先行研究と一貫した結果を得た。

次に、研究2では目標フレーミング (goal framing) 効果研究の文脈において、制御焦点の要因 (獲得に着目するか、損失に着目するか) を組み込んだ上で研究を行うことの重要性について明確にした。目標フレーミング効果とは、呈示する目標 (もしくは、帰結) のフレーミングを操作することで、メッセージの説得効果が変わる現象を指す (Levin, Gaeth, Schreiber, & Lauriola, 2002)。目標フレーミング効果に関する先行研究では、帰結として示された内容がポジティブであるか、ネガティブであるかという帰結の感情価にのみ着目したうえで、ネガティブな帰結を呈示するネガティブ・フレームにおいて説得効果が高まることが概ね一貫して示されていた。研究2では、こうした帰結の感情価だけでなく、帰結の制御焦点の要因を組み込んだ上で、目標フレーミングの操作が説得効果 (研究では説得対象として「水道施設の耐震化政策の支持」を扱った) に与える影響について検討した。その結果、先行研究と同様に帰結の感情価の効果が有意であり、ネガティブな帰結に焦点化するネガティブ・フレームは、ポジティブな帰結に着目するポジティブ・フレームに比べ、高い説得効果をもたらすことが明らかになった。また、より興味深いことに制御焦点の効果も確認され、予防焦点のメッセージ (損失と非損失に焦点化したメッセージ) は、促進焦点のメッセージ (獲得と非獲得に焦点化したメッセージ) に比べて、高い説得効果をもたらす可能性が示された。以上の研究2の知見は、帰結の感情価の効果とは独立に制御焦点の効果の存在を示す結果であり、制御焦点理論に立脚した研究を実施することの意義を示すものであった。

以上の内容を第1章で述べた後、第2章以降では課題に対する粘り強さに対して制御焦点が影響する可能性について、関連する先行研究に基づき論じた。そして、熱望方略を採用する促進焦点に比べて、警戒方略を採用する予防焦点は、課題に対する粘り強い取り組みをもたらす可能性がある結論し、予防焦点が促進焦点よりも粘り強い取り組みをもたらすとの仮説1を提起した。さらに、粘り強い取り組みが可能な条件下では、予防焦点の個人は不得手とする創造性に関連する課題のパフォーマンスを高めるとの知見、さらには促進焦点よりも高い学業パフォーマンスをもたらすとの先行研究に基づき、予防焦点の個人は、促進焦点の個人に比べて、粘り強い取り組みによって課題パフォーマンスを高めるとの仮説2を立てた。

こうした仮説を検討するため、創造性課題である日本語版遠隔連想テスト (研究3-5) と自由再生課題 (研究6) を時間的制約を設けずに実施することで、予防焦点は促進焦点に比べて課題に対して粘り強く取り組むかどうかを課題取り組み時間に基づき検討し、さらにはそうした粘り強い取り組みによって、予防焦点は促進焦点よりも高い課題パフォーマンスを示すか、について検討を行った。このうち、日本語版遠隔連想テストを用いた研究3-5では以下のことが明らかになった。すなわち、特性と文脈の制御焦点の両者を検討対象にした研究3では、文脈の制御焦点の操作が粘り強さと課題成績に影響するという結果は確認できなかったが、特性としての予防焦点傾向が促進焦点傾向に比べて相対的に強くなるほど、課題に粘り強く取り組む可能性が示された。さらに、文脈の制御焦点を操作せず、特性の制御焦点にのみ着目した研究4では研究3と同様に、予防焦点傾向が相対的に強くなるほど粘り強く課題に取り組むことが示された一方で、課題パフォーマンスに対して制御焦点傾向が異なることの影響は確認されなかった。また、研究3における制御焦点の操作に加え、制御焦点に対応する明示的な目標を与える厳格な制御焦点の操作方法を用いた研究5では、予防焦点を強める操作が、促進焦点を強める操作に比べて、粘り強い取り組みをもたらすことが明らかになった。さらに有意傾向であったものの、そうした粘り強い取り組みによって、予防焦点は日本語版遠隔連想テストの成績を向上させる可能性が示された。

つづいて研究6では知見の一般化可能性について検討するため、創造性課題のように未知の情報の検索を必要とせず、既知の情報の検索のみが必要とされる自由再生課題を用いた上で、仮説1, 2を検討した。こうした研究6では、予防焦点は促進焦点に比べてより長く自由再生に時間を

費やし、その結果として記銘した単語の再生数が上昇することが明らかになった。すなわち、自由再生課題を用いた研究6では、仮説1と仮説2はともに支持された。

つづいて、研究3-6までの成果を総合した上で仮説1と仮説2の確からしさについて検討するため、研究3-6の成果を網羅した小規模メタ分析 (small-scale meta-analysis) を実施した。分析の結果、制御焦点の差異は課題に対する粘り強さに対して、有意な小から中程度の効果量をもって影響することが確認され、予防焦点は促進焦点に比べて課題に対して粘り強く取り組むことがあらためて確認された。さらに、課題パフォーマンスに対しても小さいながら有意な効果量が確認され、粘り強く課題に取り組める条件下では、予防焦点は促進焦点よりも優れた課題パフォーマンスをもたらす可能性が示された。すなわち、メタ分析の結果は、仮説1、仮説2と整合するものであった。

このように、本研究では制御焦点の差異が課題に対する粘り強さに影響し、最終的には課題パフォーマンスの向上をもたらす可能性が示された。こうした知見は、教育場面や職場といった粘り強い取り組みが必要とされる環境において、粘り強さを高めるための効果的な介入や教示手法の提案につながり、さらには個人の制御焦点に応じた条件設定がその個人の潜在的なパフォーマンスを引き出すための重要な要因であることを示すものであった。このように本研究では、課題への取り組み時間という行動指標に基づき予防焦点が促進焦点よりも粘り強い取り組みをもたらすことを示したが、その背景メカニズムについて検討できていない。このため、将来的には、制御焦点理論に関する研究知見だけでなく、獲得状況と損失状況における人の価値判断傾向に関する研究知見を広く参照しつつ、なぜ予防焦点が促進焦点に比べて粘り強い取り組みをもたらすかについて明らかにしていく必要がある。